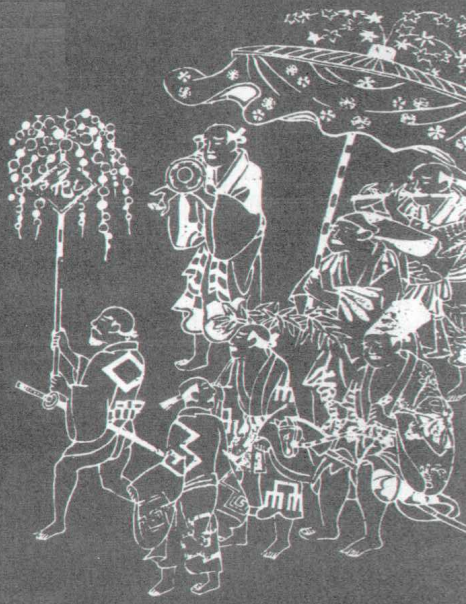
西鶴人情橋

吉村正一郎
yoshimura shoichiro

鶴人情橋

吉村正一郎
yoshimura shoichiro



講談社

●**吉村正一郎**（よしむら・しょういちろう）

1939年1月1日生まれ。大阪府出身。59年、米国市民権を取得して渡米。63年に帰国。L. A. ベルモントスクール成人科卒。81年、「石上草心の生涯」で第58回オール讀物新人賞受賞。現在、茨城県岩井市在住。

西鶴人情橋（さいかくにんじょうばし）

著者＝吉村正一郎

一九九三年一月十四日　第一刷発行

発行者＝野間佐和子

発行所＝株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号　一一二―〇一

電　話　編集部（〇三）五三九五―三五〇五

販売部（〇三）五三九五―三六一二

製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

© Shoichiro Yoshimura 1993 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

西鶴人情橋（さいかくにんじょうばし）

装幀／菊地信義

カバー画／堂本印象「冬朝」（部分）

（京都国立近代美術館蔵）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

1

「お京は亭主に先立たれてこの方、女の細腕一本でお店を切り盛りしてきたそうや。亡夫と杢之助は幼なじみ、なにくれとのう相談にのっているうちにそこは男と女、なるようになってしもうた。かたや分別盛りの男、こなたは後家はん、誰に迷惑かけるでなし、わては別状ないと思うのやが……こなさんはどない思いなはる？」

西鶴は信十郎のいかにも武芸者らしい精悍な貌を覗きこんだ。

幕府御用両替商十人組のなかで第五番目に数えられる天王寺屋作兵衛の跡取り息子杢之助が『ようでけた嫁』と評判のお袖との間に三歳と当歳の二人の女子までなしながら、なんの不足があってか京呉服商〔京屋〕の後家お京に入れあげたあげく、ついに勘当されてしまった……そのことを西鶴はいっているのだ。

信十郎はいつもながらの無表情のまま静かにうなずいた。

「このたびのお仕置きは親類縁者一族総意のことやというが、むろんこうときっぱり決めはったんは、こなさんもようご存じの天王寺屋五兵衛どのや。『これが新町辺りで放蕩してるいうのんなら少々ハメをはずしたところで笑い話ですましもでける。ほんでもお京は素人、お互いどこま

でいってしまうかわからしまへん。この手の火遊びはな、いったん燃えだしたら燃えつきるとこまでいかんと決着がつかんもんや。おなごのあそこはな、家も蔵も山かてのみこんでしまうもんでっせ。そないなってからでは遅すぎる。災いは芽ぇのうちに絶ちなはれ』とはまことに五兵衛どのらしいものいいや」

西鶴は〝クワイ〟と自称しているいかつい坊主頭を両方の掌で撫でまわし、つづけてごつごつした疱瘡面を音をたてて叩いた。それはなにかに熱中しはじめるときの、あるいは熱中している最中の彼の癖だった。

「たしかに商人は信用が元手、まして両替商ともなればなおさらやと、そないに思案するのが町人の才覚や。五兵衛どのは天王寺屋のご本家、ご意見はもっともしごくやが……」

西鶴は今度は爪を噛みはじめた。しばらく思案をしたのち両手の甲を目前に並べて眺めた。噛みすぎたせいで爪先の間から血が滲みだしている。

彼は痛そうに顔をしかめた。

（西鶴どのはとうに不惑の歳を迎えられたはずであるが……）

信十郎は内心で微苦笑を浮かべた。彼には自分より十五歳も年上の男がときとしてまるでヤヤのようにも見えてしまう。

「西鶴どの」

身内をたしなめる口調で信十郎がいった。

「ほ？」

西鶴は一瞬浮かない表情をし……ちょっと照れたように笑った。

西鶴はいま悩んでいる。手すさびに仕上げた浮世草紙本〔好色一代男〕が思いがけず売れに売れて足掛け二年、書肆からは、

「早う次作を」

と矢の催促にも、肝心の筆のほうが立たず虚しく今日の日まで過ごしてきた。

むろん全く書かないでいたわけでない。ありていにいえば書けなかったのだ。それでも苦しまぎれに何本かはどうにかこうにか纏めもした。しかし正直いってどれもこれもよくなかった。

西鶴はどの作品も執筆中から信十郎に見せ批評をききたがったから、日の目を見ずに消えてしまったいくつかの作品を、西鶴同様、信十郎も知っている。

「どやろ？」

そのつど西鶴は心細げにたずねる。

「さよう……」

そのまま沈黙をつづける信十郎の表情を探るかのごとく西鶴はじっと見つめ、

「さよか……」

独り合点にうなずく。結局のところは自分に問いかけているだけなのだが……どういうわけか西鶴は信十郎の鑑識眼をひどく信用していた。信十郎は小説の出来不出来などよくはわからないしさほど興味もない。それでも西鶴が小説に取り組んでいるさまは見ていて鬼気迫るものがあった。

だがこのところの西鶴はたいてい、

「やっぱりあきまへんなあ」
と自分勝手で決着をつけ、溜息をつく日々が多くなっていた。そうしたおりの彼の姿は自信たっぷりなときにくらべてまるで別人である。
信十郎は、
（この落差の激しさにおれはひかれているのかもしれない）
と思うことがある。自らの情念をおもてにあらわさないことを最上の美徳として生きてきた信十郎にとって西鶴はやはり〝摩訶不思議〟な人間であった。
西鶴が義理に迫られていやいや出した〔好色二代男〕は不評で、
「わての才も出尽くしや」
彼は大いにぼやき悲嘆にくれた。
だが信十郎は黙っていた。こたえられるような事柄でもない。剣の道と同じで自ら解脱するしかないのだ。
西鶴は迷っている。彼はまだ俳諧を完全に捨てきれないでいる。

2

信十郎が西鶴に初めて出会ったのは四天王寺の縁日の日、

「負けてえな」

とこれが信十郎にむかって西鶴の発した最初の言葉であった。一瞬、信十郎はわが耳を疑った。冗談にも負けるわけにいかない。負ければ見せ金の一両が消えてしまう。それはまた肌付金でもあった。どれほど困窮しても小判一枚を肌身離さず身につけておくのが武士のたしなみなのである。本来もののふは常に死と対面している。武士の武士たるゆえんはいつでも死ねるかどうか——それだけだ。

そのうえ信十郎は武芸者だから武芸の意地が絡めばいつなんどき果たし合いになるかもしれないし、そうとなれば必ず勝つとはかぎらない。

いわば肌付金一両は死に支度であり葬式代なのだから、初対面の男にくれてやるいわれなどなかった。

「なんともうされた？」

信十郎は穏やかにきいた。むろんこの折りの信十郎はまだ西鶴の名も身分も知らなかった。

見かけは法体である。だが坊主ではないし医師でもない。信十郎の浪人暮らしは父子二代にわたるもので年期が入っている。これまでは、たいてい相手が何者か見極めがついたが……彼の正体だけは定かにわからなかった。

「負けてえな、たのみますわ、これにはわての名誉……いや将来がかかってますのや」
西鶴が笑った。いかつい面体に似あわない明るく爽やかな笑顔で、一瞬、信十郎の胸に暖かく懐かしいものが過った。
（これはいったいなんだろう？）
殆ど反射的に父の姿が甦り、
（父上……）
と彼は声にはださずつぶやいた。

二年前、信十郎は敬愛してやまなかった父を亡くしている。
父もまた剣客であった。武芸で鍛えぬいたがっしりした体軀と精悍このうえない容貌の持主だった。だから目前に佇む坊主頭で疱瘡面の西鶴は亡父と似てもにつかない。そのうえ年齢も大分若い。それなのに信十郎は西鶴に父の面影を見た。いや父というのが不自然なら兄といってもよい。いずれにしても身内からうける心優しい感覚だった。だがこれも可笑しいといえば可笑しい。なぜなら彼には男きょうだいはいないのだ。
「お悪いようにしまへん。見せ金を頂戴する気ぃもおまへん。それだけやございまへん、じゅうぶんにお礼もいたします。そやから、どうぞどうぞ負けておくなはれ、この通り、おたのみもうします」
西鶴は愛想よい笑顔のまま悪戯っぽく頭をさげた。彼の上方言葉が江戸育ちの信十郎の耳にいつになく優しげに響いた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

「よろしい」
信十郎がうなずいた。
彼は剣客である。人を見る眼に自信もあった。あるいは長い浪々の身の上からくる物侘しい気分が、どこか心の片隅で人間らしい触れあいを求めていたのかもしれない。
信十郎の武芸は一風も二風も変っていた。
〔奇妙奇天烈摩訶不思議剣法、試合料、銭十文、当方ノ負ケレバ謝礼一両〕
と立て看板にある。
彼は地面に胡座をかいたまま一尺二寸ほどの木刀を持って構える。対する相手には刃渡り三尺八寸の木刀を持たせ四方八方随意の位から撃ち込ませる。
実はこの刀身の長短が曲者だった。仕掛ける側は信十郎の剣先が自分のほうまでは届かないと思って力まかせに撃ち込んでくる。相手の力を利用して信十郎は絶妙の気合で切っ尖を撥ねあげる。
客が手にする木刀の全長は四尺三寸、商売上〔燕返し〕と異名をつけている。それが上空二十尺も跳ね飛ぶさまはそれだけでも絵になった。さらに落下してくるところをいとも無造作に片手で受けとめてみせるから観衆はいやでも〝やんや〟の喝采をおくることになる。
もっとも信十郎自身は尻の下に木製の丸い回転椅子のようなものを敷いていた。身体の向きを自在にきかすための工夫である。
この種の技を信十郎は亡き父より手ほどきをうけた。むろん武芸としてであって亡父が信十郎のような大道芸をおこなっていたわけではない。

磯部左次郎兵衛行基……元赤穂浅野家江戸屋敷お抱えの剣士であった。ひとかどの剣客なら誰知らぬ者のない名だ。いったいに赤穂浅野家は他家にくらべてことさら武芸を重んじたが、それにはやむにやまれぬ事情があった。

浅野家は長政の代に豊臣家五奉行の首座をつとめたほどの名門だが、秀吉の死後、長政は家康に遠慮して隠居をねがいでた。このとき養老料として常陸国真壁郡と筑波郡の五万石、近江神崎郡に五千石、あわせて五万五千石をもらった。やがて関が原の戦いが起きると長政の嫡男の幸長は徳川方について目ざましいはたらきをみせ、紀州和歌山三十七万石をかちとった。次の長晟の代にはさらに芸州広島に栄転、四十二万六千石を領し、大大名として十二代、幕末までつづいている。いわゆる浅野本家である。

しかるに赤穂浅野家は単に長政の養老料を継承しただけの家格であった。長政の三男、長重が常陸笠間城に入ったのがそれでいわば捨て扶持をもらったのである。ちなみに大石良雄（内蔵助）の祖父良欽はこの長重に仕えその屋敷跡は今でも笠間市内に残っている。長重の子長直の代に赤穂に移封するが、当時の赤穂城はさしたる規模でなかった。これを長直は十三年間の長きにわたり心血をそそいで増築完工したのである。

彼はまた家臣たちに文武を奨励した。山鹿素行が男盛りの三十代を赤穂で過ごしたのも長直に招聘されたからである。長直は自らの祖が只同然で五万余石をうけついだことに病的なほど強い羞恥心を抱いていた。江戸城松の廊下で刃傷を起こした長矩は長直直系の孫にあたるがなににも増しての兵法者好きで、軍学者粟飯原惣兵衛、馬術の赤埴源蔵、槍の高田郡兵衛などを麾下におき、高田の馬場の仇討ちで名をはせた中山（堀部）安兵衛にいたっては半年にわたってかき口説

き無理やり召し抱えた。
ともあれ赤穂浅野家は慶長から寛永にかけての荒々しい気風を元禄時代まで保ちつづけた希有な家柄であり、そうした家風の家に磯部左次郎兵衛行基は武芸達者として仕えた。
その左次郎兵衛が赤穂城落成を祝う御前試合で藩のお抱え剣道師範役、貝谷忠兵衛に敗れた。それも尋常の負け方ではなかった。
もっともそこへ至るまでの布石はあった。当初、試合は儀礼的に型のみを見せる手筈になっていた。城代家老大石良昭の配慮であったが、むろん左次郎兵衛に否やはなかった。彼は江戸で仕官して以来ずっと江戸詰めで、赤穂の地を踏んだのもこれが最初であった。初対面の多くの人々にも世話をかけているしのちのちの縁もある。いわば奉納試合、勝敗よりも縁起第一、相手を撃ちのめしたところで恨みを買いこそすれ格別名誉になるものでもない。なりゆきによっては地元武士団との間にヒビが入らないともかぎらない。なにごとも平穏無事のほうがいいに決まっている。
しかしそうした周囲の配慮が試合直前になって長直公の耳にとまった。
武をもって鳴る公は黙ってはいなかった。
「わが藩に人は無きか？　ならば左次郎兵衛に十人抜きの荒技をもうしつける。者ども、我と思わん輩は出張って立ち合え」
と命じた。
公としてはほんの座興のつもりであったろう。念願の築城がかなった高揚感に、自らの眼識を誇りたい気持が加味されてのことだ。それほどに左次郎兵衛の腕前を信じていたということもあ

る。

九人目まで左次郎兵衛は鮮やかにいずれも一振りで勝ち抜いた。いささかも相手の軀に触れることなく、木刀のみを中空高く舞いあげた。それが公の知るところの、そして常々江戸城は〝柳の間〟にあって同席の大名方にご自慢なさるところの左次郎兵衛の荒技であった。

異変は十人目に起きた。

ふいに左次郎兵衛の腰が萎えたのである。今風にいえばギックリ腰……脊椎分離症であった。左次郎兵衛はついに立ち上がれなかった。

旬日後、腰萎えが癒えた左次郎兵衛は腹を切ろうとして大石良昭にいさめられた。

「お主はお城完成のめでたい席を血で汚すおつもりか？」と。

左次郎兵衛は独り赤穂の地を離れ妻子の待つ江戸に帰った。

親子二代にわたる長い浪々の暮らしが始まった。左次郎兵衛は道場荒らしで糊口をしのぎながらさまざまに工夫を凝らし、たとえ腰が萎えても対処できる術を編みだした。それは当初より座位をとり初太刀の一撃で敵を倒すというものであった。むろん常の兵法にはない型である。左次郎兵衛は〔腰抜け剣法〕となかば自嘲気味に呼称していたが、一口でいえば居合術の範疇に入る。

信十郎とてなにも亡父が残してくれた妙技を大道芸などにしたくなかった。しかし二年にわたる流浪の末、路銀を遣い果たし、そのうえ母が病んだためにやむなく始めた商売なのだ。

初手のうちは気恥ずかしくもあるし、むろん口上など一切いえなかった。それでも慣れるにし

たがい少しずつ度胸もつき、それとともに追々に観客も増え、さらには評判をとるようにもなった。それでも若い娘たちが大勢つめかけてきたことだけは予想外で、信十郎はしばしば茫然とした。

たしかに剣をとったときの彼はきまっていた。むしろ美しくさえあった。信十郎見たさに娘たちはあつまってくるのだが、彼自身は気づいていない。しかし彼女らの嬌声が自分の技に華を添えてくれているのはわかるし、その娘たち目当ての若い男衆が増えたこともよくわかっていた。彼らが娘たちにせがまれあるいは恰好をつけようと、次々に試合を挑んでくる。今では第一のお得意さまなのだ。最近は信十郎も心得たものでそれとはなしに危うい立ち合いを演じてみせる。

（おれも人が悪い……）

ときとして反省もし、忸怩ともなるのであるが無邪気に喜ぶ若者たちを眺めると、

「間一髪でありましたな」

などとつぶやいてみたくもなるのだった。しかし西鶴は……そうした彼らとは全く異質の挑戦者であった。

「構えは中段と下段の間がよろしい。間合いは腕を伸ばしたとき、切っ尖がこちらの身体にようやく届くほどが絶妙です。おわかりですか？」

「こうでよろしおますか？」

西鶴が立ち上がり信十郎の助言通りに構えた。

一瞬、信十郎は息をのんだ。西鶴の構えは一流の兵法者といっても遜色がないほどの自然体だった。

信十郎の脳裏に、
（心得ある者では？）
と疑念が湧いたほどである。
いかなる兵法上手といえどもおよそ剣を手にしたとき五体に些少のムリが生じる。だが西鶴にはそうした不自然さはなく、ただ無邪気にたたずんでいた。
（学ばずして無念夢想流を会得したかのようだ。もしこの道一筋に修行をしていたなら、世に隠れもなき名人上手になっていたかもしれぬな）
と信十郎は思った。
むろんそこまでは買いかぶりであろう。もし西鶴が真剣を手にしていたなら、とてものことにこうはうまくいかなかったはずだ。
「結構です」
口にはださずうなずいてみせる信十郎の身近へ西鶴はいま一度近づき、
「そやそや、まだ試合料を払うてなんだ。たしか十文……そうでんな？」
と大仰な声でいった。
「さよう」
「ほなら……こうっと……この木刀めが邪魔やなあ。こなさん、すんまへんけど持っててくれなはるか？」
西鶴は木刀を信十郎に預け、袂をたぐると浅黄色の巾着をとりだした。
西鶴の一連の仕種は最初から呆れるほど念入りで芝居じみていた。彼が近寄ったり離れたりす

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook